（別紙２）

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　ガブラコヴァ　デンニッツア　ステファノヴァ

ガブラコヴァ　デンニッツア　ステファノヴァ氏の「文明と希望―近代日本における「雑草研究」」は、「雑草」をキーワードにして、明治末から一九七〇年代までの日本近代文学を論じた意欲作である。

ガブラコヴァ氏は、近代文学に描かれる多くの雑草のイメージに着目し、これを手がかりとして多くの文学作品を横断的に読み解くとともに、それらのイメージが担う意味を考察する。自然としての雑草は、人間が作り上げる人工物に入り込み、これを覆いつくす一方で、破壊のあとの生命の萌しを告げる。こうして雑草は近代文明が抱え込む不安と、再生への希望を象徴する。また、雑草のイメージを伝える多くの作品の表現形式自体と、多様な作品間に共有される雑草イメージの伝播にも、雑草的性質が観察できるという自己言及的な現象が指摘できる。ガブラコヴァ氏が用いる分析の方法は、テクスト内およびテクスト間において、隣接性の原理すなわち換喩的なレトリックと換喩的関係性を指摘することであり、また、多くのイメージの間に「入れ子」的構造を指摘することである。それは一種の記号論的テクスト分析であるとともに、近代文学にみられる近代の意識とその歴史的変遷を辿ろうとする文学史的記述の試みでもある。また、雑草をキーワードに、異なる時代の異なる書き手による多様なテクスト群を、一つの視野のもとに収めようとした比較文学的テーマ研究でもある。

本論文は、四部五章に分かれる。以下、論文の構成にしたがって内容の概略を記す。

序章においては、与謝野晶子の「雑草」に触発されて書かれたとされる魯迅の『野草』から、生と死、記憶と忘却、夢と覚醒、内面と共同体といった、本論全体で問題となるいくつかのテーマ軸を取り出し、それらを近代文明に生きる希望と結びつけて論じる。

次に「割り込む」と題された第一部では、まず第一章「温室の中の雑草園―北原白秋における内面的空間の構築」において、北原白秋の詩に現れる「温室」や「雑草園」のイメージが、植物園、露台、屋上庭園、花壇、植木鉢などとともに、人工的都市空間に存在する閉ざされた内面空間を表現していることを指摘する。そのような内面空間は故郷の記憶と幼児回帰につながるものでもある。ここには、本論の主要な分析概念である「入れ子」の構造が十分に確認できるのである。

続く第二章「子供の「園」の「雑草園」」においては、植物園の延長としての子供の園の空間に焦点があてられる。雑草としての子供たちと、園に生える雑草の関わりが、賀川豊彦の幼稚園教育の思想や、倉橋惣三『幼稚園雑草』における雑草礼賛と未来への希望に絡めて論じられるのである。

「生い茂る」と題された第二部では、まず三章「「雑草の季節」―大自然の「雑草園」」で、「雑草研究」に強い関心を寄せる与謝野晶子が、自己の性欲、政治欲、制作欲を、雑草のイメージで捉えていることが確認される。関東大震災を隔てて晶子の詩「雑草二編」(1915)と北原白秋の随筆「雑草の季節」(1929)が響きあうなど、雑草のイメージは日本近代文学の空間にまさに雑草的にはびこっているが、こうした関係性のなかに、前田夕暮の『緑草心理』や、相馬御風の『雑草園』や、雑草を描く日本画家郷倉千靭の作品も位置づけられることが確認される。震災後の生命の蘇りと開放感を描く白秋の『雀の生活』には、幼児回帰、故郷回帰の願望が濃厚に漂うが、夕暮は雑草園のイメージに共同体への夢を投影し、御風は雑草によって子供を語るのである。

第四章「雑草の生い茂る故郷的空間―武蔵野」では、故郷回帰の願望が一つの具体的な空間を対象とする例として、武蔵野の表象が取りあげられる。国木田独歩の『武蔵野』や大岡昇平の『武蔵野夫人』が言及されるとともに、織田一麿の『武蔵野の記録』、白石実三の『新武蔵野物語』などが引用され、随筆や写真のなかに定着される武蔵野の姿が確認されるとともに、都心に残された武蔵野としての皇居の空間が論じられる。

「生き延びる」と題された第三部の第五章「不屈の草」では、太宰治、福永武彦、野呂邦暢、大庭みな子といった作家の小説群が、魯迅の『野草』と大庭みな子の『野草の夢』をつなぐ想像力の系譜の中に位置づけられる。「文明の患者」魯迅を「惜別」のなかに描きだした太宰は、『パンドラの匣』で結核療養所における死の絶望と生の希望を語るが、これは同じ療養所を舞台とする福永の『草の花』が、草のイメージを通して戦前戦後の共同体における生と死を語ることに通じる。自衛隊の演習場における擬似的戦場体験を描く野呂の『草のつるぎ』には、草と同化する兵士たちの生の体験と帰郷願望が描かれる。そして、植物的想像力というべきものに貫かれた大庭の『浦島草』や『ふなくい虫』では、戦争という恐るべき破壊と再生の物語や、故郷への執着が語られる。大庭の『花と虫の記憶』に認められる、故郷と自然に憧れる都会人の孤独こそが、まさに「野草の夢」を紡ぐことになるのである。

以上のように要約されるガブラコヴァ氏の論文に対し、審査委員からは以下のような評価、批判が寄せられた。

まず、ガブラコヴァ氏が発見した「雑草」というテーマの有効性と、それが日本近代文学史に問いかける問題の重要性が高く評価された。また、雑草のイメージが近代文学の作品群に雑草的な拡がりを持つという自己言及的性格の指摘にも強い関心が寄せられた。日本近代文学に焦点をあてた論考ではあるが、これが世界文学的視野のなかで十分に語られうる問題であることも確認された。

一方で、「野草」「草」などの用語と併用される「雑草」の定義が必ずしも明確ではないこと、相互に関連する作品群の比較文学的対比記述が控えられているために読者の理解が妨げられることがあること、雑草のイメージの発展軸にそった時間的記述ではないために叙述に分かりにくさが残ること、「入れ子」の概念に不明な点が残ること、等々の難点

が指摘された。

個々の叙述について審査員といくつか議論があったほか、扱った作品群の選択や、今後の研究の展望について質問があった。また、全般的に日本語表現に分かりにくさが残ることが、遺憾とすべき点であると指摘された。ただし、これはガブラコヴァ氏の挙げ得た功績を本質的に損なうものではないことも確認された。

したがって、本審査委員会は、ここにガブラコヴァ氏に対し博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定することに、全員一致で合意した。